



## 第一章 夏

「ハロー、ハロー、ハロー」

ひどく抑揚よくようを欠いた声だった。

僕が彼と出会ったのは、六月末の湿った空気が充滿する夜の自然公園で、彼は、だらしなくベンチからずり落ちていた。まるで戦争映画で負傷した兵士みたいな姿で、彼は剥むき出しの地面に尻をつき、だらりとベンチに寄りかかっていた。

そのまま無視して通り過ぎようとすると「なあ、君」と彼が僕を呼び止めた。けれども、いくらか呂律ろれつが回っていない調子だったので、やはり僕は無視して通り過ぎようとした。多分、酔っ払いか何かだろう。面倒めんどうごとは御免である。

「なあ、君！ 耳みみが聞こえないのか!? それとも、こればかりは洒落しやれにならない冗談じやうたんだったのか!?」

まったく何を言っているのか分からない。僕は律儀な二十四時間営業のスーパーマーケットに夜食を買

に出かけただけであって、この公園はそんなスーパーマーケットへの通り道であり、その帰り道に過ぎないのである。

しかし、ここで無視することによって逆に彼を刺激してしまい、そこから穏やかじゃない事態に発展されても困るので、僕は仕方なく反応を返すことにした。

その選択が正しかったのかどうかは分からない。

「随分ずいぶんと酔よってるみたいだ」と僕は振り向いて言った。

すると、彼は無言で、シャツの胸ポケットからロシアの兵士が持っているみたいな銀色の容器を取り出した。それは、酒が入っている以外、他に想像ができない形をしていた。そして、彼は、それを、ぐいつ、と叩たたつてから、ぶんつ、と勢いきほい良く放り投げた。銀色の容器は水銀灯かんたかにぶつかり、甲高かんだかい音を立てた。

「これで文句はないだろう？」と彼は口元くちぶちを拭ぬぐった。

「どうなんだ？ それでも、君は俺に文句があるのか？」

「文句はないですけど」と僕は答えた。

「ああ、暑い！」彼は胸を押さえて叫んだ。「暑くて

どうにかなつてしまひそうだ！」

それはそうだろう。随分と強そうな酒を一気に呷つたんだから。それも、こんな湿気の多く蒸し暑い夜に。どうかしてる。

僕はスーパーマーケットの袋の中からミネラルウォーターのペットボトルを取り出し、彼に差し出した。

「よかつたら、どうぞ」

「あ……ああ」と彼が顔を上げる。すると、遠くから届く水銀灯の淡い光が、微かに彼の顔を照らし出した。その顔は、思ったよりも若いように見えた。彼はペットボトルを手に取ると、毒でも入つていやしないだろうかといった具合に、目を眇め、様々な角度から眺めた。それから「未開封だよ」と答えた。そして「つまびらかにね」とつけ加えた。

「つまびらかに、か」と彼は神妙な面持ちで頷いた。

「ええ、つまびらかに」と僕は言った。

彼はペットボトルの蓋を開けて、ぐいつ、と先ほど酒を飲んだ時と同じように呷った。そして、そのまま

一気に五百ミリリットルの水を飲み干した。ペットボトルが空になると、彼は大きく息を吐いた。すると、少しだけ楽になったようだった。彼は言った。

「つまびらかつてのは……大事だよな。至極、そう……至極——それは、重要視されるべき命題だよ」

「まあ、そうですね」

首肯しつつも、僕は内心で首を傾げる。なんだつて？ 重要視されるべき命題？

「君は、世の中の何もかもつてやつが、つまびらかになるべきだと思うか？」

「どうでしょうね。知らぬが仏、という言葉もありますから」

「知らぬが仏」

再認識でもするみたいに呟いた彼の声は、ひどく乾いた響きを孕んでいた。ただ、あまりにも真摯な風だったので、それは、むしろ滑稽な色合いすら帯びてしまっていた。

「それじゃあ僕は、このあたりで」

家に帰ろうと踵を返す。これで一人暮らしならば何

も問題はないのだけれど、ちよつとばかり喧しい人が家で待っているので、あまり時間をかけるわけにはいかない。彼女は妙なところで心配性なので、ひよつとすると今も落ち着かないといった感じでそわそわしていたりするのかもしれない。そういう姿を想像すると、まあ……ちよつとばかり萌えたりもするのだけれど、「砂漠だ」と彼が言った。「君は、砂漠で俺に水を差し出してくれた男だ」

「砂漠にスーパーマーケットはないですよ。多分ね」僕は言った。「でも、スーパーマーケットで僕は水を買った。だから、ここは砂漠じゃない」

「いや、砂漠だね。あるいは、俺は精神の砂漠を彷徨っている。誰にも会いやしない。これは、精神の渴求だ。すっかり乾いちまつてる」

「ええつと……まず、あなたは家に帰って寝るのが先決だと思えますけど」

一応、意識があるにはあるようだから、大丈夫だろう。再び僕はこの場を去ろうとする。

「待ってくれ」

映画とかなんかで、部屋から出て行こうとする人を何度も呼び止めるシーンがあるけれど、この時、僕はそれを思い出していた。あれは、ひどい場合だとちよつとばかりうんざりする。

「名前は？」と彼が訊いた。

僕は首を振った。

「名乗るほどの者じゃないです」

「いや、名乗るほどの者だよ。君は水をくれたんだぜ？」彼は何やら思い直したような顔になった。「いや、何よりも、俺の言葉に耳を貸してくれただろうか？ それさ。それが、俺は嬉しかったんだ。今の世の中、誰も人の話なんか聞いちゃいない。そう、まったく、聞いちゃいないんだからね」

「それは、あなたの思い込みかもしれませんよ」

「いや、みんな『声』の大きい人間の言葉しか聞こえない。しかも、それは明々白々に、意図して作られた『声』なんだ。だが、しかし、どいつもこいつも、そういう『声』に、見事なまでに洗脳されてる。まあ、大方の人間は、それすら気づいちゃいないみたいだが

ね。由々しき事態だ、現状だ」

「被害妄想ですよ」

「その通りだ」と彼は頷いた。「いつだって、何もかもは被害妄想なんだからな」

つき合い切れない。

「それじゃあ、僕はこれで」

「おい、名前は？ 名前を教えてくださいよ」

「手塚治虫」

彼は、ふむ、と唸った。

「変な名前だ」

「よく言われます」

彼は偉大な漫画家の名を知らないのだろうか？

「俺は七尾春也だ」

「僕は真上草太郎」

「うん？」彼は首を捻った。「じゃあ、さっきのは誰の名前なんだ？」

僕は俯いて、小さく息を吐き、頭を掻いた。

「ペンネーム」

面白味はないけれど感謝はすべき、そんな中流階級の象徴のような我が家に到着すると、むすつとした顔で腕組みをしている金髪の女の子が玄関で出迎えてくれる。

「遅い」

目を細めてこちらを見る彼女の声には、咎めるような響きがあった。

「ちよつとしたトラブルがあつてね」

彼女が、怪訝そうに眉根を寄せる。

「トラブル？」

「事故みたいなもんだよ」

彼女は途端に慌てたような表情になる。

「え——そ、それって、どこか怪我したわけ？ だ、

大丈夫なの？」

「いや、別に本当の事故に遭ったわけじゃないんだけどね」

「言い方が紛らわしいのよ！」

げしつ、と彼女の放ったローキックが僕の足に直撃

する。

「つつ……つつたく、君は冗談の通じないタイプだよな」

ぶいつ、と彼女は顔を背けてしまう。

「悪かったわねっ」

それから、呆れの入り混じった息をつき、彼女が尋ねる。

「で、結局、何があったのよ？ 転んで膝でも擦り剥いたわけ？」

「酔っ払いに絡まれてたんだ」と僕は正直に答えた。

「ふーん」

「嘘だと思う？」

「別に……疑ってるわけじゃないけどね」

その言葉通り疑っているような様子はなかったが、どうやら少し怒っているようだった。

「怒ってるのかい？」

「そうね、怒ってるわね」

彼女の語気が少し荒くなる。

「勝手に出かけたから？」

彼女は眉間に皺を寄せて頷いた。「ええ」

僕はこめかみのあたりを指で掻きながら苦笑する。

「悪かったとは思ってるんだ。でも、君はソファで気持ち良さそうに寝てたから。わざわざ起こすのも悪いと思って」

彼女は、不機嫌そうに金髪をくしゃりとやって、大きく息をついた。

「そういう気遣いは……余計だと言ってるのよ」

「でも、年頃の女の子がよだれを垂らしながら寝るのは、ちょっとどうかと思うけどね」

「う——っ」

瞬間、彼女の顔がカーッと耳まで真っ赤に染まった。

「あと、夜食の後にすぐ寝ると太るらしいよ？」

「う、うるさいっ！」

軽く声の裏返った彼女の放った拳が、ごすつ、と僕の柔らかな鳩尾にヒットする。

「ごふっ」

僕は重く呻いて、その場に蹲ってしまふ。

うう……そろそろ手加減とか、そういうものを知ってもらいたいだけけど。

「あ——ご、ごめん、普通に殴っちゃった！ あははははは……えーつと……大丈夫？」

「つたく……すぐ手が出るのは、君の悪い癖だよな……」

僕が腹を押さえて立ち上がると、彼女はジトツとした視線を向けてくる。

「しっかし……アンタも懲こりないわよね」

「君をからかうと面白いからな」

「なんですつて!？」

「嘘！ 嘘だつて！ 君をからかってても、なんにも面白くないです！ ええ、面白味の欠片かけらもないです！

まったく面白くないです！」

「それはそれでなんかムカツクわね！」

「じゃあ、普通！ 君の面白さは普通！ 平均的！

人並み！」

「それもなんかイライラするわ！」

「どうしろつてんだよ！」

はあ、と僕はため息をつく。

「何ため息なんかついてんのよ」

「いや、別に」

「アンタつてさ……」

彼女がじーっと視線を向けてくる。

「なんだい？」

「マゾじゃ、ないわよね？」

「どうしてそうなった」

彼女は急に深く考え込み始める。

「だって、自分から相手の痾かえに障さる言葉を投げかけて肉体的苦痛を誘発させるなんて、どう考えても正気の沙汰さたとは思えないわ」

「僕は君が正気だとは思えないけどな」

「でも、それがマゾヒスティックな快感を得るためだとすれば、様々な符号ごうごが繋つがるわ」

「繋がんねーよ！」

「アンタ、ヘンタイだったのね」

「どう考えてもこの流れは一方通行すぎるだろ！」

「やだ、近づかないでよ！ ヘンタイ!？」

「！」  
 こ、こいつには、いつも哀れな子羊のように虐げられていた僕の痛ましい姿が、まったく見えていないのか。

これが、想像力の欠如ってやつなのか。

相手の痛みが想像できない若者ってやつなのか！

彼女はしれっとした表情で、ひょいっと、何かブツクでも動かすみたいなジェスチャーをする。

「まあ、冗談は置いといて」

「冗談で済ますな！ 僕の傷ついた心をどーしてくれんだよ！」

「な、何？ 足で踏まれたいわけ？」

「余計に傷つくわ！」

「えっ？ マゾなのに？」

「冗談だろ!?!」

すると、彼女は頬を赤らめて、視線を逸らす。

「あ、あれは、拒否反応を示したのがやりすぎだと思つたから、冗談だってアンタに分かるように……」

「何、そのビミョーな気遣い!?!」

呆気に取られる僕に、彼女は胸にそっと手を当てて言った。

「ま、まあ、わわ、私は心が広いから、特殊な、ご趣味くらいは、ご寛恕しますけれどもございませわ！」

むっちゃ動揺してるじゃないですか！

声とか、尋常じゃないくらい震えてるし。

しかも、どうやら現在の彼女の中では、僕がマゾヒストだというのが確定事項になってしまっているらしい。

ていうか、家の玄関で僕ら、何やってんだろうな

……。

「さあ！ いいわよ！」

急に、彼女がファイティングポーズを取る。

「……………」

えっと……何？

「来なさいよ！ 最高の一撃を喰らわせてやるわ！」  
 殺す気か！

言葉の出ない僕を見てか、彼女が不思議そうな顔を

する。

「どうしたのよ？」

さすがの僕も、命は惜しい。

「ま、待て。僕は、マゾヒストなんかじゃない！」

「……え？ 何が？」

「君の、勝手な勘違いだ」

「……………」

この時の彼女の表情は、まるで温かみのないコンクリートのようだった。普通に怖かった。

彼女の回し蹴りが僕の腰を捉える。少し遅れて、左の腰に強い衝撃。「かはっ」と声を上げ、その場に僕は蹲った。

「最、低っ」

そして、彼女は肩を怒らせながら、腰まである長いブロンズを揺らし、大腿で廊下の向こうに消えていった。

……。

今回、どう考えても、一方的に僕が被害者のような気がするのだが。

玄関に蹲る僕は、誰にもなく呟いた。

「しかし、短めのスカートで回し蹴りとか平気でするのは、やっぱり問題だよな」

がちやり、とドアノブを回す音に続いて僕の部屋のドアが開き、ぬっ、と寝巻姿の彼女が顔を出した。薄いブルーの清潔感のある寝巻である。まだ少し怒っているのか、むすっとした顔だった。

「それじゃ、私、寝るから」

「ああ」僕は振り向いて軽く手を上げた。「おやすみ」

再びドアは閉じられる。僕はデスク・チェアの背もたれに寄りかかり、天井を見上げ、息を吐いた。

ノックくらいしてくれよな。そのことについては何度も言っているのだけれど、彼女は一向にノックをしてくれる気配がない。僕だって一応は健康な男子高校生なわけだから、勝手に入ってこられては困る場合だってある。しかし、僕の部屋には鍵がついておらず、

まさかガムテープを貼<sup>は</sup>っておくわけにもいかないので、誰かが急に部屋に入<sup>い</sup>ってきても良いように、常に『男として』倫理的な態度を取らなくてはならないのである。しかも、男のサンクチュアリとも呼べるはずの自室でだ。

ただ、これでも少しはマシになつた方だ。この家に彼女が住み始めた頃など、僕と一緒にの部屋で寝るといつて聞かなくなつたわけだから、これは、やはりマシになつたといえるだろう。まあ、ちなみに、それは彼女が心から僕と一緒にの部屋で寝たい、ということではなくて、つまり、彼女には『僕と一緒にの部屋で寝なければならぬ』理由があつたわけだ（当初は彼女も不本意な感じだつた）。ただ、それが、もし同い年くらいの男子であれば、僕だつて別に一緒にの部屋で布団<sup>ふとん</sup>を並べて寝ることは一向に構わない。けれども、これが同い年の女の子、ましてや強力な美貌<sup>びよう</sup>と抜群<sup>ひやくぐん</sup>のスタイルを兼ね備えた『美少女』——といつても差し支えないだろう——と一緒に部屋で寝るということになれば、これは些<sup>いささ</sup>か事情が変わつてくる。

けつこう、人間の本能と理性の關係というのは、信用の置けないものだから。

机の上のスーパーマーケットの袋から、僕はツナマヨネーズのおにぎりを取り出した。手順に則<sup>したが</sup>つて包装紙を引<sup>ひ</sup>つ張る。おにぎりにぱくつき、機械的に咀嚼<sup>そしゃく</sup>する。次に清涼飲料水のペットボトルを半分ほど飲む。すると、ぱらぱらと乾いた音が聴こえてきた。雨が降つてきたらしい。網戸の方に視線を向ける。細かい網戸の日に特有の湿つた匂いを鼻が感じる。雨が屋根を打つ音を聴きながら、僕はぼんやりと網戸の向こうにある闇を見つめる。そうしていると、次第に雨の勢いが強くなつてくる。ぱたぱたぱた、と大きな雨粒が屋根を激しく打ちつけている。それは、何かを告げる宣誓<sup>せんげん</sup>のようにも聴こえる。雨が入ってくるので、僕は窓を閉めた。そして、かちやり、と窓の鍵を掛けてから部屋を出る。薄暗い廊下は、しんと静まり返っている。彼女の部屋（元々は来客用の部屋だつた）を見る。もう彼女は寝ているのだろう。明日は学校だ。寝なくち

やならない。誰だって、そういう規則の中で生きていく。少し部屋を出たところで立ち止まった後、なるべく音を立てないようにして階段を降り、そのまま洗面所に向かった。電気のスイッチを入れる。洗面台の前に行き、口の中をゆすいでから、ゆっくりと歯を磨く。歯を磨き終わると、洗面台の縁に両手をつけて、じつと鏡を見つめる。そこに映るのは自分の顔だ。それは、自分以外の何者でもない。けれども、時々、そこに僕は何か引っかけりのような違和感を覚える。それは僕自身であると同時に、僕自身ではないのだ。そういう違和感だ。僕の中には僕の知らない何かがある。そして、それはとても不吉なもののようにも思える。そういう意味合いにおいては、多分、僕は自分自身というものを知らないのだろう。いや、あるいは、誰もが本当の自分などというものは知らないのかもしれない。では、だとすれば『本当の自分』というものは、果たしてどこに存在するのだろうか？ 静かに目を閉じる。激しさを増す雨音は何かを告げている。それは、何かの始まりを告げているようにも思える。何が始まるの

か。

夏が始まるのだ。

※

「あちーな」

目を覚ました僕の第一声はそれだった。

全身がぐっしりと汗ばんでいた。別に悪夢を見たとかではない。いや、そもそもどういふ夢を見たのか覚えていない。あるいは、内容を覚えていないということ、良い夢だったのかもしれない。人間の記憶というものは、案外、嫌なことしか残らないものだから。昨日の夜に降り始めた雨はすでに止んでいて、カーテンの隙間から漏れている光を見る感じだと、外は晴天のようだった。

部屋の中は、蒸すような暑さ。

夏——。

昨日の夜あたりから、暑いな、とは思っていた。どうやら昨日あたりで梅雨が明けて、これから本格的に

夏に突入ということらしい。

ベッドから抜け出し、廊下に出る。廊下はいくらかひんやりとしていたが、それでも数日前よりは明らかに暑かった。

一階のリビングに行くと、誰もいなかった。どうやら、彼女はまだ寝ているらしい。ちなみに、現在この家には僕と彼女しか住んでいない。

ひどく咽が渴いていた。僕は冷蔵庫から麦茶を取り出す。そして、グラスに注いだ麦茶を一息に飲む。それから、リビングのソファに座ってテレビをつける。

ふわあゝあ、と大きく欠伸あくびをしてから、置時計を見る。現在時刻、六時ちよつと過ぎ。

ふと、昨日の夕方に彼女から言われたことを思い出す。

——六時に起こして。もし起こさなかつたら……分かつてるわよね？

その時、彼女は握り拳を見せつけてきた。

つまるところ、六時に彼女を起こさなければ、僕は『ぶつ飛ばされる』らしい。もはや、脅しの域である。

まあ、いつも言われていることなのだが。

僕はソファから腰を浮かし、再び二階に戻った。そして『勝手に入ったら怒るわよ！』と殴り書きされたホワイトボードがかかったドアをノックする。勝手に入って怒られるわけにはいかない。

返事はない。これがミステリ小説じゃなくて、本当に良かったと思う。それならば、ここで彼女が死んでいるなどという可能性はあるまい。いや、そんな超展開、僕は許さないぞ。再びノックしてみる。返事なし。今度は少し強くノック。返事なし。仕方ないので、今度は「六時ですよ」と呼びかけてみる。返事なし。次に「朝ですよ」と呼びかけてみる。返事なし。「常々、僕は君のことを随分な暴力女だと思っているのですが、そのことについてどのようにお考えですか？」と尋ねてみる。返事なし。駄目だな、あの女——というのは潜在意識に眠っている僕の別人格の発言なので、今の発言が僕の本心じゃないということは、ここで自らに弁解しておくことにする。

しかし、ここで起こさずにぶつ飛ばされる(笑)の

も、なんだか納得がいかないな。その後には起こる展開を先読みすると……、

「どうして起こしてくれなかったのよ!？」

言い訳の機会も与えられず、問答無用で腹を殴られる僕。

「かはっ」

僕を見下ろす彼女の瞳は、氷のように冷たい。

「どーせ寝坊でもしたんでしょ？　ほんと、しょうもないヤツね」

「ぼ、僕は……ちゃんと、起こしたぞ……ノックで」

「ちよつと……言い訳するなんて、男らしくないわよ!」

「君が、起こしても起きなかつたんじゃないか……」

「め、目覚ましじゃ起きれないんだから、仕方ないじゃない!」

「努力しろよ」

「してるわよ!」

「なあ、冷静になって考えてみてくれ。この場合、根本的に悪いのは、どっちだと思う?」

「そんなの全面的にアンタが悪いに決まってるじゃない!　どういう思考回路してるわけ!？」

「嘘だろ」

ひどい話だ。こんな未来、僕は望んじやない。そうだな、確か未来は自分次第でいくらでも変わると、各方面の様々な漫画などで耳にタコができるくらい聞かされているわけだし（正確には読まされているわけだが）、ここはひとつ、勇気を振り絞ってみるのも悪くないのかもしれない。そう、自分の未来は自らの手で切り開かなくてはならないのだ。

よし、起こそう。

意を決してドアノブを回し、僕は部屋の中に足を踏み入れた。

「……………」

久しぶりに見る来客用の部屋は、見事にとっ散らかつていた。これが、部屋を片づけられない女というやつなのか……。まあ、僕も人のことは言えないけれど、それでも、もうちよつと部屋を綺麗にしようと心がけているつもりだ。

あたりを見渡す。

しかし、ひどいな……まるで地獄だ。

そして、ベッドの上の彼女に視線を移す。

「——っ」

思わず、一步、後退あしずさってしまった。

なんて格好をしているんだ。

本来、清潔感があるはずの薄いブルーの寝巻は、はだけにはだけていた。上から三つボタンが取れていて、胸元が微妙なアングルで露あらわになっっている。捲まくれあがって白く滑らかな腹は出ているし、乱れに乱れた長い金髪もなんだか妙に艶なまめかしい。暑さのせいか、時折「ん……」とか小さく呻くあたりも、あんまり僕の理性にとつては良くない話だった。寝相ねざうが悪いのは知っていたけれど、ここまでとは思わなかった。しかし、全裸であるよりは、こんな具合に意図せず着崩れている方が、ある種、美とエロチシズムの問題に真に迫っているのかもしれない。そんな風に思う。……。まあ、そういう世界だ（ただのヘンタイとも言うけれど）。

まあ、彼女の現在の状態について、こうなっ

った理由はなんとなく分かる。まず、とても部屋が蒸し暑い。それは、部屋を閉め切っているのと、部屋の

エアコンを彼女が使っていないからだ。立場上、彼女はセキリティ（単なる戸締りとじまりも含めて）に関して神

経質になっているところがある。だから、窓の鍵もす

べて閉めて、基本的に部屋を閉め切っている。また、

妙なところで生真面目まじめだから、居候の身でクラーの

電気代を消費することに引け目を感じているらしい。

目の前まへに狼おおかみの影を心に宿した男がいることなど知ら

ず、寝苦しそうな表情を浮かべて「うーん」と寝返り

を打つ彼女を見ながら、難儀なまじだよな、と思った。

さて……彼女を起こすべきだろうか。

改めて散らかった部屋を見る。

「……………」

起こそうと思つて下手にベッドに近づいたら何かに

躓つまずいてしまい、そのまま倒れ込んだ先に寝ていた彼女

がちように目を覚ましてあらぬ誤解を受けるとい

う、そんな定石パターンに引つかかるのもアレだよな……。

結局、僕はそつとドアを閉めて部屋を出た。それか

ら、リビングに戻ると、冷蔵庫から卵とベーコンを取り出し、それを軽くフライパンで調理して、ベーコンエッグを作った。

のんびりソファに座って食後のコーヒーを飲んでみると、ドタドタドタと激しく階段を降りてくる音がして、リビングのドアが勢い良く開いた。

「どうして起こしてくれなかったのよ!？」

案外、僕には予知の才能があるのかもしれない。

※

これが僕の最近の生活ぶりである。

時代遅れの『革命家』の息子である僕、真上草太郎、

時代遅れの『革命家』の父が寄越したボディガード、通称『金色の騎士』、黒姫カノンとの――。

※

家を出た後、僕とカノンは並んで歩いていた。僕は腹を押さえている。予想通り殴られたからだ。ドメステイック・バイオレンスだ。

すっかり日差しも気温も夏のそれで、緩やかな坂道に沿って立ち並ぶ青い木々は、まるで夏の到来を喜ぶかのように、朝の微風に揺れていた。青い空は高く、どこまでも突き抜けていくような、そんな透明感があった。

坂の途中まで来たあたりで、

「君にも何か渾名あだながあった方がいいと思うんだ」

と僕は言った。

カノンが胡乱うらんげな目つきで眉を顰ひそめる。

「急に、何？」

「親しみやすい方が人に好かれる」

「別に、私は渾名で人に好かれなくてもいいんだけど――」

しかし、僕は構わずカノンに渾名を提案する。

「『不機嫌なカノン砲』とかどうかな？ 自分で言うのもなんだけど、君にぴったりだし、なかなかセンス

もいと思うんだ。自分の才能が怖いよ

殴られた。謝った。

「でもさ、前々から思っていたんだけど、その、二つ名っていうのかい？ ええっと、なんだっけ？」

「金色の騎士」

「わはははは」

「ちよっと、どうして笑うのよ？」

「『金色の騎士』（笑）て」

蹴られた。

結局、カノンに渾名をつける話は流れてしまった。

残念だ。

「それより、今度からはちゃんと起こしてよね」

カノンが咎めるような視線を向けてくる。ふむ、と

僕は唸った。

「君は朝が弱い。だったら、普通に寝てればいいじゃないか。寝ていたって、誰も文句を言わないぜ」

すると、カノンは不機嫌そうに言う。

「そうはいかないわよ」

「朝ごはんを作ることに君はこだわってる。苦手な朝

に早起きをしてまでね。そんなに料理が好きなのかい？」

「そういうわけじゃないけど……」

「じゃあ、どういうわけなんだ？ 朝は僕が作ったっていいんだぜ」僕はつけ加える。「味は保証しないけど」

カノンは料理が上手だ。正直なところ、僕が作れるものは非常に限定的なので、最近、料理は彼女に一任していた（というか彼女の提案だった）。もちろん、買い出しや食器などの後片づけはさせてもらっている。それに、何よりも女性の手料理というのは、男としては憧れるものがあるので、僕としては嬉しい限りなのだけ……。

カノンは何か言い淀んだ後、視線を逸らして口を尖らせた。

「そこは、なんていうか……やっぱり私が作ってあげたいのよ」

そう小さな声で言った後、カノンは、ごによごによ、と続けて何か言い訳めいたことを並べた。

「……………」

時々、黒姫カノンという女の子が分からなくなる。女の子というのは、本当に難しいものだ。

「朝から見せつけてくれるな」

抑揚のない低い声でした。

坂を上ったあたりの角から、赤毛まじりの男と女の子が歩いてくる。この暑さだというのに、男はやけに涼しそうな顔をしている。また、女の子は眠たげな顔で口に食パンを啜くわえて、はもはも、とリスみたいに食べている。

鯨くじら辺べの兄妹。兄と妹。鯨辺釘男くじらべ 釘おと鯨辺凜くじらべ 凛。兄は同級生で妹は中学一年生。

二人は僕の幼馴染である。

「やあ、釘男」僕は男に向かつて軽く手を上げた後、女の子の方を向く。「おはよう、凜ちゃん」

凜ちゃんは食パンを啜くわえたまま丁寧にお辞儀する。

「おはようございます」

釘男が暑さなんて感じていないような顔で言った。

「暑いな、今日は」釘男がカノンを見る。「今日も元

気そうだな、黒姫」

「おはよう、鯨辺クン」とカノンは苦笑して挨拶あいさつを返す。「でも、見せつけてるつてのは、少し心外なんだけど」

「でも、お前たちはつき合ってるんだらう？」

カノンはへらつと笑って肩を竦すくめた。

「まあ、お情けみたいなもんね」

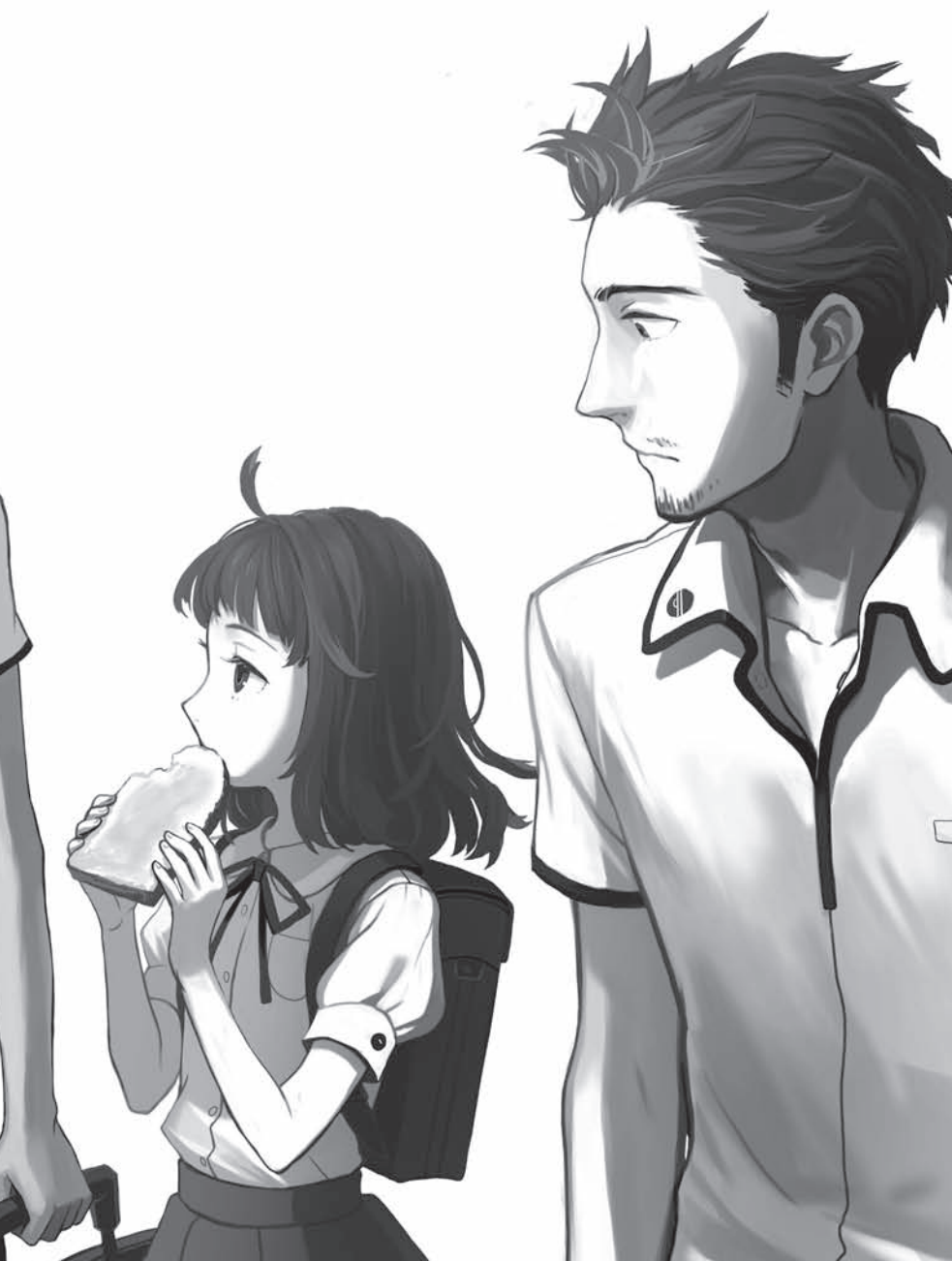
「……………」

お情けだつて？

カノンは苦笑しながら僕を指差す。

「それに、こいつつてば、ヘタレだし、ケンカも弱いし、運動も勉強も並だし、なんにも誇るところなんかないじゃない？ そんな男の告白を受けてやるような女の子なんか、この世界に私くらいしかないでしょ？」

む……可愛い顔して何気にひどいこと言ってるよな、こいつ。しかも、何ひとつ間違ったことは言っていないだけに、こちらとしては何も反論できないのだった。「分かったよ」と僕は神妙に頷いて言った。「じゃあ、





別れよう」

「へっ？」

カノンの目がきよとんとなる。

「というわけで、僕は改めて凜ちゃんに告白することにするよ。まあ、あっさりとつけられるかもしれないけれどね。でも、同情でつき合ってもらうくらいなら、別れた方がいいんだ」

「えっ、え？」

カノンは頭に大量の疑問符を浮かべている。

「そういうわけで、凜ちゃん、僕とつき合ってくれなかな？　まあ、さすがに年齢的に世間の目もあるから、君が高校生になってからでもいいんだけど」

凜ちゃんは、いつもの表情の乏しい顔で僕を静かに見上げた。

「いいですよ」

僕はにっこりと笑う。

「ありがとう」

「ロ、ロリコン——っ！」

カノンはドン引き——というより、複雑そうな表情

だった。しかし、すぐさま、ツン、と顔を背けてしま  
う。

「ふ、ふん、いいわよ、別に。そうね、これでお別れ  
ね！　ご勝手にどうぞ！　じゃあ、私は鯨辺クンとつ  
き合うことにするんだから！　アンタみたいなヘタレ  
より、よっぽどいいわ！」

「そっか。じゃあ、釘男、カノンを頼むよ」

釘男は、ふっ、と本当に少しだけ口の端を緩めた。

「お前らも仲がいいな。まるで夫婦漫才を見せてもら  
ってるみたいだ。余計なおせっかいかもしれないが、  
黒姫も、もう少し素直になっても——」

「行きましょう、鯨辺クン」

ぐいつ、と喋り終えていない釘男の腕を掴むと、カ  
ノンは肩を怒らせて、大股で先に歩いて行ってしまっ  
た。

やれやれ。

そもそも、僕ら、本当につき合っているわけじゃな  
いだろう。

いや、確かに以前、僕はカノンに告白めたことを

口走ってしまったことがあった。しかし、それも含めて、僕とカノンが今のような関係になったのは、一年前に起きた『ある事件』が原因であり、あの時の告白めいた言葉だって、一種の吊り橋効果みたいなものだったんじゃないかと思う。

一応、釘男と凜ちゃんに対しては、僕とカノンはつき合っているということになっているのだけれど、もちろん、本当につき合っているわけではない。カノンは、表向きには、父の知り合いの娘さんを真上家で預かっているという、そういう扱いになっている。ただ、両親のいない家で二人っきりで暮らしているという状態なので——これはカノンの提案だったが——友人や知人に対しては、僕らは恋人同士ということになっていた。その方が自然といえは自然……なんだろうか？改めて考えてみると、何か違う気もするのだが。

まあ、実際、いちやつくわけでもないし、別にデートとかするわけでもないし……。

ちなみに『ある事件』というのは、当然、すでに終わってしまった話のことである。つまり、過去の話と

いうことだ。けれども、何かひとつのことが終わっても、それでも人生は続く。

「相変わらずですね、草太郎さん」

僕は我に返った。

「ああ、凜ちゃん」

見ると、四分の一ほどに減った食パンを小さな手に持つ凜ちゃんが隣にいた。ちなみに、カノンと釘男は前を歩いている。剣呑な目つきのカノンが一瞬だけ振り向いたが、しかし、ふん、とすぐに視線を逸らされてしまった。どうやら釘男はカノンの愚痴を聞かされているようだった。内容が聞こえなくても、見れば分かる。

「遊ばれてますね、カノンさん」

凜ちゃんが前を向いたまま言った。

「えっ？」

「ちなみに草太郎さん、自覚ありますよね？」

「うん？ 自覚？ なのかい？」

「ああ、なるほど」と凜ちゃんが見上げてくる。「自覚なしですか」

「あるかもよ？」と僕はにこりと笑いかける。

「なしですね」

あつさりと切り捨てられた。

鯨辺凜。

長い赤毛まじりの髪に、微かに赤味がかつた瞳。背は僕の胸のあたりまでである。声は落ち着いていて、やはり兄と同じく抑揚に乏しい調子。

鯨辺の兄妹は二人とも感情表現が乏しい。けれど、兄の釘男の場合は西洋人めいた彫りの深さと相俟ってクールな印象を与えるし、妹の凜ちゃんの場合は知的でおとなしい印象を与える。それでも、やはり一部からはとっつきにくいイメージを持たれてしまうらしい。ただ、それは決して二人が感情を欠落しているというわけではない。それは、幼い頃から一緒にいた僕だからこそ分かるのかもしれないが、ちよつとした表情の動きや、ちよつとした言葉のニュアンスから、二人の希薄な表情や口調の奥にあるものは十分に読み取ることができる。

「でも、さつきはごめん」と僕は謝った。

「何の話ですか？」と凜ちゃんは小首を傾げる。

「ダシに使っちゃったから」

凜ちゃんはそつと長い睫毛を伏せて、あつさりとした調子で言った。

「ああ、わたしと草太郎さんがつき合うという話ですか」

「もちろん、冗談だから。もし気分を害したなら、謝るよ。ごめん」

「そうですか」と凜ちゃんは言った。「まあ、怒ってはいません」

「よかった」

「でも、少し残念です」

僕は苦笑する。

「幻滅されたかな」

「そういうことじゃありません」

「うん？」

凜ちゃんが、まるで何かを推し量るような目で見上げてくる。

「あの……それ、分かかって言ってますよね？」

「えっ？」

凜ちゃんは、ちょっと難しい顔になった。

「これだけの年月を一緒に過ごしていても、たまに草太郎さんのことが分からなくなることがあります。一体、どちらなのか」

「うん？」

僕は首を傾げる。すると、凜ちゃんは小さな吐息を漏らした。

「いえ、なんでもありません。今のは気にしないでください。ただ——」凜ちゃんは淡々とした調子で続けた。

「あなたがち、わたしもまんざらではなかったということです」

「えっ……あ、ああ、まんぢら曼茶羅、曼茶羅ねっ。曼茶羅！つまり、凜ちゃんは『曼茶羅ではなかった』ということだね。『彼女は曼茶羅ではなかった』。うーん、深い言葉だ。哲学的だね」

凜ちゃんの咎めるような視線が向けられる。

「やっぱりそれ……わざとやってますよね？」

「ごめん、今のはわざとだった」

「草太郎さんは、わたしのことが嫌いなんですか？」

「嫌いじゃないよ」

「好きでもないよ」

「いや……好きだけども」

「それは、妹のような存在として、ですよね？」

「えっ……ああ、うん、そうだね」

ふう、と凜ちゃんは息をつく。

えっと……うん？」

「草太郎さん、悪い人です」

「まあ……そうだね。僕は悪い人なのかもしれない」

「そこで認めないでください」

「しかも、僕にはM疑惑もかかっているしね」

「なんの話ですか」

「もし凜ちゃんがSだったら、僕らの相性はバツチリだったという話だね」

「じゃあSになるように努力します」

「……………」

「どうしました？」

「いや、ごめん、今の嘘」

「じゃあMになります」

「いや、そういうことじゃなくてね……」

「両方、ですか」呆れたように凜ちゃんがため息を吐く。「そこまでだと、むしろ感服しますね。これはもう、わたしの負けでしょう」

「いや、違うから」僕は首を傾げる。「それと『負け』って……何が？」

凜ちゃんは、まるで観念したみたいに、曖昧あいまいに首を振った。

「敗者は全てを失います。これで、わたしはあなたのものです。どうぞ、お好きに」

「その、意味が分からないよ」

「いらないんですか？」

「いや、いるとかいらんとか、そういう問題じゃなくってね」僕はとりあえず話題を逸らすことにする。

「というか凜ちゃん、SとMの意味なんて、そもそも分かっているだろうか？」

「それくらい知ってます。サディズムとマゾヒズムのことですよ。つけ加えるなら、サディズムという言

葉はフランスの作家であるマルキ・ド・サドに由来していますし、マゾヒズムという言葉はオーストリアの作家であるザッヘル・マゾッホに由来しています。両方とも、性的倒錯レイプの一種です」

「……博識だね」

「ただ、実践したことはないですが」

「あつたら問題だよ……」

「それで、わたしはSになった方がいいんですか？草太郎さんには、確かM疑惑がかかっているんですよ？ わたし、けっこう責めますよ？」

「いや、責めなくてもいいし、Sになんかならなくてもいいよ……。そして、これからもずっと、なる必要はないから」僕は言った。「それに、もし今の君がSになったら、特定の層を喜ばせるだけだしね」

「特定の層？」

「うん」

「どういう層ですか？」

「……………」

「どうして黙り込むんですか？」

「……………」

「……………」

「オゾン層」

凜ちゃんがすごく微妙な表情になった。

露骨に表情に出ないだけに、痛い視線だった。

最悪だ。何も面白くなんてない。逃げ場もない。ごまかすためとはいえ、最低だった。

しかし、凜ちゃんは暫し<sup>しば</sup>地面を見つめた後、顔を上げ、意を決したように言った。

「フロンガスを撒き散らします」

「は？」

「規制にも負けません」

「……………」

「オゾン層を喜ばせたくないですから」

「いや、やっぱりオゾン層は大事にしようよ………ていうか、僕の絶望的なボケに真面目に返さなくてもいいよ……。ごめん、これも僕が悪かったみたいだ」

凜ちゃんは目を逸らしてしまった。

「草太郎さん、やっぱり悪い人です」

そんなつまらないことを言い合っているうちに、凜ちゃんの中学校への分かれ道に来たので、そこで別れた。前に行くカノンと釘男———というかカノン———には、近づかせない類のオーラが出ていたので、僕は黙って二人の後をついていくことにした。

すっかり町は夏の気配を漂わせていた。行き交う車の発する音と排気ガスも、どことなくいつもと違って感じられる。商店の前では、中年の女性がホースで水を撒いている。途中にある家の犬小屋の前では、犬が、はっはっはっ、と舌を出して息をしている。また、所々の塀には毎年恒例の夏祭りのポスターも貼ってあった。季節には匂いがある。夏の匂いがある。じつとりと、シャツの中に汗が噴き出してくる。

僕は立ち止まって手を掲げると、透明感のある青さを湛<sup>た</sup>えた高い空に浮かぶ、夏の太陽を眺めた。

太陽が眩<sup>まぶ</sup>しい。

まるで、狂ってしまいそうなほどに。

「今日は来ないみたいだな」

釘男が、教室のドアを見て言った。

午前の授業が終わり、昼休みになったので、僕と釘男は教室で弁当を食べていた。弁当は、昨日の夜にカノンが作っておいてくれたものである。おかげで昼の慌しい購買部に向かう必要がない。あれは戦争みたいなものだ。いつか死人すら出るような気がする。

「やっぱり、朝のこと怒ってるんだろね」と僕は玉子焼きをつつきながら言った。

「お前も、もう少し優しくしてやったらどうだ？」

「してるつもりだよ」

「そうは見えないがな」

「だろね」僕は言った。「僕もそう思う」

すると、ふっ、と釘男は微かに口の端を上げた。

鯨辺釘男。

赤毛まじりの髪をライオンのたてがみのように後ろになでつけ、また、顎と鼻の下にはワイルドに髭が生え揃っている。垂れ目気味で、彫りが深く、鼻が高い。そのため、どことなくギリシア彫刻のような印象を受

ける。奥に光る眼は鋭い。体格はがっしりとしているし、運動もできて、頭も良い。見た目は恐い感じだが、まあ、僕なんかには比べれば、随分と出来た男である。

そんな釘男と僕は、幼稚園の頃からのつき合いだった。

「そういえば、またラブレターを貰ったそうだ」

釘男が箸で唐揚げを口に運びながら、興味なさそうに言った。

「ラブレター？」

「下駄箱に入ってたらしい」

「今どき？」

「今どき」

「で、誰が貰ったって？」

「凜が」

「へえ、やっぱりモテるね」

「そうだな」釘男が僕を見た。「どう思う？」

「ん？別に、いいんじゃないの？」

「まあ……そうだな」

「うん？どうしたんだい？」そこで僕は思い当たる。

「あ、もしかして、兄としてはちょっと複雑だったりするの？」

「そういうわけじゃない。あんまりにも反応が薄かったからな」

「誰の？」

「お前の」

うん？ どういうことなのだろう？

僕が首を傾げていると、釘男はなんでもなさそうに言った。

「凜に、お前にそのことを伝えろと言われていたんだよ」

「僕に？」

「ああ」

「どうして？」と僕は訊く。

「さあ」と釘男は答えた。

やっぱり、女の子というのは分からない。凜ちゃんは『わたしモテちゃって困るんですよ』アピールをするような子じゃないから、そういう類の意図ではないと思うんだけど。

「ちなみに、ラブレターの相手は男の子？」

「多分な」そこで釘男は何か思い至ったような顔になる。「ああ、黒姫のケースのことか」

「まあ、ああいうのは……特殊な例だとは思うけどね」

ちなみに、カノンは隣のクラスである。いつもなら昼休みは僕の机を三人で囲み、僕と釘男とカノンで下らないことを喋りながら昼飯を食べている。

以前、そんな風に三人で机を囲んでいる時、カノンからこんな相談を受けたことがあった。

——あのさ……女の子から告白された場合って、どうしたらいいと思う？

思わず顔を見合わせた僕と釘男は、呆気に取られながらもカノンに事情を尋ねた。話を聞いてみると、なんでも、同じクラスの女子からラブレターを貰ったということだった。同性から告白を受けるというのは、カノンの人生で初めてのことだったらしい。どうしたらいいか分からない、かといって、他に相談できる人間も思いつかない、というわけで、僕と釘男に打ち明

ける決意をしたのだという。そういう素振りは見せなかったけれど——そのことを誰かに相談するべきか否かも含めて——カノンもかなり悩んだようだった（プライベート的なことも含めて、カノンとしては相手の気持ちに対してどう向き合おうかが問題だったらしい。律儀なことである）。

結局、そのラブレターの件に関しては、悩みに悩んだ挙句、丁重にお断りしたのだが、その一件のこともあり、どうやらカノンは男女両方面から好意（恋愛の意味合いも含めて）を持たれているらしいということが分かってきた。正直、最初は周囲に馴染めるかどうか少し心配していたのだが、それは僕の取り越し苦労だったらしい。まあ、異性はともかく、同性からも好かれるというのは、本当に魅力的な人間であるという証拠なのだろう。

僕は何気なく教室のドアを見た。

「ま、彼女、面倒見なんかもいいしな。クラスじゃ、随分と人気もあるみたいだし」

「だろうな。それに、黒姫は美人だし。男どもは放っ

ておかないだろう」

「あれ？ 珍しいね、君の口から誰かの褒め言葉を聞けるなんて。しかも異性の」

「事実を口にしただけだ」

「そういうや、君は好きな人とか、そういうのっっていないのか？ そういう話、したことないけど」

「今のところはな」

「それこそ、カノンなんかは、どうなんだい？ 多分、君なら殴られたり蹴られたりしなくて済むぜ」

「黒姫が聞いたら、シヨックで寝込むぞ」

「まさか」

釘男は視線を伏せた。「悪いやつだな、お前は」

「それ、君の妹にも言われたんだけど」

「じゃあ、悪いやつなんだろうな」

「まいったね」僕は頭を搔く。「すっかり悪人だ」

「まあ、それはともかく、黒姫には、何か人を惹きつける特別なものがある。それは確かだろうな。容姿や言動というのも、もちろん要因のひとつではあるんだろうが、それを超えたコアみたいなものがあるんだろ

う」

「コアねえ……でも、まあ、それでも君には敵かなわないんだろうな」

「ん？」と釘男は顔を上げる。

釘男は、他人のことには鋭いくせに、自分のことには自覚がないんだよな。

「君は、自分で思ってるよりも、ずっと周囲の人間から好かれてるんだぜ？」

釘男は、なんとというか、一種のカリスマ性のようなものに恵まれている。中学の頃から片鱗へんりんを見せ始めてはいたけれど、高校に上がったあたりから、それは大いに発揮されているように思える。もちろん、みんながみんなというわけではないけれど、それでも、彼の周囲には、自然と人が集まるのだ。

「あれは、勝手に集まってくるだけだ」

「そういうのを、カリスマって言うんだよ」

「そうか」

「君はクールだよな」

「ドライなだけだ」

僕は苦笑する。

「だから、そういうのをクールって言うんだよ」

「そんなことよりも……いいのか？」

「何が？」

「黒姫のこと」

「ああ、あれは、いつものことだよ……多分」

釘男の目元が緩む。

「お前らも不思議なやつらだよな」

「そうかな？」

「ケンカしてばかりに見えるが、どっかで気を許しあつてる。絆きずなってやつかもな」

「よしてくれよ、絆、だなんて」

「凍が嫉妬するのも分かる気がする」

「うん？ 嫉妬？ 凍ちゃんが？」僕は微笑する。

「まさか」

「ああ、そうだ、凍から、もうひとつ伝言があったんだ」

だ」

「伝言？」

「ああ」釘男は制服のズボンのポケットから水色のメ

モ用紙を取り出すと、それを僕に差し出した。「まず、これを渡しておこう」

「これは？」

そこには携帯電話の番号が書いてあった。

「あいつ、ついに携帯電話を買ってな」

「あ、そうなんだ」

「それで、伝言は『もし黒姫カノンに嫌気がさしたらこちらの番号まで』と」

「なんだかフリーダイヤルの相談窓口みたいだな  
……」

「それと『わたしはいつでもオッケーですから』だそ  
うだ」

「……………」

「確かに伝えたぞ」

※

これが、僕の愛すべき日常。

何か特別な事件が起こるわけでもない、そんな日常。

僕は今の日常以上のものを求める気はない。

鯨辺の兄妹やカノンと、この大鴉市たがしで共に暮らし、つまらないことを言い合い、そして——それから先のことは分からないけれど——本音を言えば、こんな感じで年を取って、静かに死にたいと思っている。本心だ。それだけだ。僕の望みは、それだけ——。

けれども、何がそのようにしてしまうのか、人間の望みというのは、いつも叶うようにできているわけじゃないらしい。それが現実だ。

そして、僕は彼と再会する。

七尾春也と。

(続く)